

## グローバル・パートナーシップ・スクール研修に参加して

八尾市立東中学校 教諭 石本 眞一

### はじめに

グローバル・パートナーシップ・スクール研修（ウィルミントン、ノースカロライナ州インアメリカ）に参加。全く初めての海外（研修）、大きな期待と重くのしかかるプレッシャーと不安。今日から始まる2週間の研修。どうなるのだろうか、立ち眩みが…。

3月23日の午後と24日の午前の2回の事前研修を終え、24日の午後から関空へ移動、いよいよである。

24日の夕方、関空発、デトロイト経由でローリー着、フライト約15時間。ローリーからホテルまで車で約2時間。約20時間の長旅。

ウィルミントン、大西洋に面した大変美しい田舎町。空気は澄み渡り、海の青、港には舟が。ホテルの庭には散り残りの桜が、季節は日本より少し先。

ここはアメリカ、人・人・人、みなアメリカ人（外国人）。聞こえて来るのは、オールEnglish。大丈夫かな、2週間。どれだけやれるかな、不安がいっぱい。しかし、やるしかないの心。

緊張！研修初日、6時起床。7時、プリンシパルが自ら車でお出迎え、大変恐縮至極に感じながら、車に乗り込む。走る約1時間、トップセイル・ミドルスクール着。広い土地に平屋の校舎、林の中の学校。入り口の所に、Welcome ISHIMOTO の文字、感激！

Good Morning! 私服、化粧、ピアス。我が目で直接見た、これがアメリカの学校・子どもたち。みんな明るく元気ダ、そして可愛い。

トップミドルの朝はReading（読書）で始まる。時間になるとグループごと（学年が入り交じっている）に決まった部屋に集まりスタート。全く静か、私語はない。

その後、施設・授業見学、目に入ってくるのはコンピューター。トイレ以外の部屋にはすべてコンピューターが。

授業中は教師も生徒も真剣そのもの。学校は学習する場、一生懸命学習しようとしないう者に対しては厳しい指導が。特に、いじめ・暴力などについては大変厳しく、程度によっては校長が直接指導、時には常駐の

ポリスが逮捕することもあるとか。

学校は『学力向上』と『今も将来も幸せに生きるために』を教育目標として大きく掲げている。

生徒の中にはトレーラーハウス（車のトレーラーを改造した家）に住む経済的にしんどい家の子も多いという。しかし、みんな結構明るく元気。

授業にも参加、地震の授業に飛び入り参加。ウィルミントンは地震のない土地とか。そこで、私の経験談をとのこと、喜んで参加。阪神大震災の話の片言英語と大げさなジェスチャーで話す。大変受けた。話（心）は通じたようだ。スピーク English a littleがなんだ！生命ごとぶつかれば通じるものだ。「人類みな兄弟」の心。

筆と墨での授業もした。漢字を書く、カタカナ・ひらかなも。「名前を書いて」と子どもの希望。イエスの返事が大変なことに。全員分、汗だくで書くハメに。でも、興味を持ってくれて大変嬉しいの感。

びっくり！それは「虫メガネで見た世界」。スーパーに並んだコーラー、なんと3ℓ・5ℓのペットボトル。バケツに入ったアイスクリーム。2mを越すヒト、人。人も物もビッグ、Big そして Large。

ウィルミントン very beautiful and very very nice town.

インアメリカでの研修、これからどうなる、これからどうする。

### 1. アメリカの学校や教師の文化に触れ、理解を深める

#### (1) アメリカの学校と日本の学校の違いについて

##### ① 管理職の先生（校長・教頭）や一般の教職員に対する社会的な評価とその地位

教育とはどこの国においても、本来的に必要なかつ大変重要なことである。その大変重要なことに携わっている教師は尊敬に値するという意味において、アメリカも日本も同じように社会的に評価されている。

しかし、教職という労働に対する報酬の面から見れば、日本の教師よりも報酬は少なく、また、アメリカ

国内でのひとつの比較として、4年制大学卒業の企業人と比べて、一般的に報酬の面では条件が悪いということである。

そのようなことから、教師という職業は報酬の面から言えば、低く見られていると言わざるを得ない(のか)。特に、男性の仕事としては低く見られているようであり、それが男性教師の数が大変少ないことと大いに関係していると思われます。

このことは一般の教職員だけではなく、校長・教頭いわゆる管理職の先生についても同じことが言えるようである。

管理職に就くには何年間かの教職経験を積んだ上に、さらに大学院で財政学・法律・Public relationなどを3年間学ぶと聞きました。校長になる条件としては、日本よりも大変厳しい条件だと思います。そして、校長になれば、その労働条件は厳しく、責任は大変重いとのことである。

日本では管理職になるまでに、その職に必要な学問や研修を修めるわけではない。その職についてから、それなりの研修をするようではあるが…。このような日本のシステムでは、学校のトップに位置する文字通りの管理職と言えない管理職も…。

アメリカの場合、上記のような条件にもかかわらず、教師になろう、教師をしているということはやはり教育に対する熱意がなければできないことではない。現に私が見た一般教職員も管理職の先生も生き生きと仕事をしていた。

それは日本と違って、校長に人事権があり、熱意に欠ける教師は入れ替えの対象となるとか、教師を辞めなければならない(?)などの厳しさが教育に対する熱意を促しているのかもしれないが…。

## ② 教職員スタッフ

教職員の配置・配属という意味での学校体制を比較すると、日本よりもアメリカの方が生徒数に対する教職員スタッフの数が多し。また、それぞれの分野の専門家を配置している。

学校のトップに位置する校長、そして副校長、さらに次期の校長候補としての校長見習いという教員もいて、1年間その学校の教職員スタッフの一員として仕事をしている。

また、一般の教職員も各教科の担当はもちろんのこと、メディア・アシスタント、カウンセラー、英語以

外の言語を使っていた生徒たちに英語の読み書きを指導する教員など、必要に応じて各分野の専門家が配置されている。

日本では外部の専門家を要請して指導に来てもらったり、その学校の教職員がいくつかの仕事を兼ねて行なったりしていることをアメリカでは別々の仕事として、それぞれの専門の教職員によって役割分担されていることになる。

日本の教育は今まさに大きく変わろうとしている。新しい教育改革を進めようとしている今こそ、教職員の配置・配属という学校体制を見直し、現在のような「なんでも屋」的教職員の集団ではなく、もっともっと専門家を配置・配属して、教育の効果・教育の充実を図っていかねばならないのではないのでしょうか。日本の今の経済的な事情からすれば教職員の人件費という予算面の問題があって、なかなか難しいことではあるでしょうが…。

## (2) アメリカの学校教育で、生徒たちに身につけさせたいと考えている一番重要なことは

### ① 基礎学力を身につけさせること

アメリカの国語であるEnglishやMath、ScienceなどのBasicな科目を重視したカリキュラムである。

ひとりひとりの学習の習得度はテストの結果によって厳しくチェックされ、個人の習熟度に応じた指導が行なわれている。

例えば、学力不振の生徒に対しては支援システムが確立されていて、学力不振克服のための校内での指導プログラムだけではなく、各カンティごとにいわばセンター校としての「カンティ・スクール」という極度の学力不振生徒のための学校が設置されている。そこには各分野のスペシャリストがいて、個に応じた様々な学習プログラムが用意されている。そして、より懇切、丁寧な指導がなされ、学力がつき次第、本来通うべき学校に復帰させるという教育システムである。

日本でもこの様な学校の設置、教育システム・支援体制の確立がなされることを望みます。

### ② 社会性やコミュニケーションスキルを身につけさせること

友だちづきあいなどの人間関係について学ばせる。

例えば、どうしたらいい生徒になれるのか、いい子であるということはどんなに気持ちのいいことなのか学ばせる。そして、他人の人権を踏みにじるような

じめ行為などは強く格好のいい、優越感を得られることではないことやいじめられて死を選ぶようなことは絶対ダメだということなどを理解させる。

すなわち、今も将来も楽しく、そして「幸福」に生きて生活するための術や方法を教科の学習や諸々の学校生活を通して身につけさせるということである。

## 2. アメリカにおける青少年の健全育成について

### (1) 学校教育におけるカウンセラーの役割とカウンセリングのあり方について

#### ① 学校教育におけるカウンセラーの役割

学校教育における教育相談活動についてはアメリカと日本では大変な違いがある。アメリカではすべての学校にカウンセラーが配置・配属されている。大規模な学校では生徒数に応じた複数のカウンセラーが配置・配属されている。

ところが、日本の場合はカウンセラーが配置・配属されているの学校の方が随分少なく、心の教育の充実などと叫ばれてやや久しいにもかかわらず、その実情は淋しい限りである。

アメリカの学校におけるカウンセラーはその学校の教職員のひとりであり、確固たるポジションと役割がある。

また、カウンセラーはいわゆるカウンセリングをするだけでなく、授業を持ち、その授業の中で「充実した学校生活を送るには」「今、さらに将来も幸せに生きるために」などの指導もする。さらに、野外での『問題解決学習』を通して、生徒に「生きる力」を身につけさせるための計画や実践を行なっている。

日本における不登校やいじめなどの問題は学校教育の課題であるだけでなく、国民的課題となっている。今、問題解決のひとつの方策として、日本の学校にもアメリカと同じようにすべての学校にカウンセラーが配置・配属されることが必要かつ重要なことである。

#### ② 学校教育におけるカウンセリングのあり方

カウンセリングを必要とする生徒は年々増えている傾向にある。非行・問題行動を起こした生徒や心に悩みを持っている生徒などいろいろである。

アメリカでの研修中は実際のカウンセリングを見学する機会はほとんどなかった。その理由のひとつとしては生徒個人のプライバシーに関わることなので見学させてもらえなかったということもある。

しかし、一度だけカウンセリングをしているその場に同席させてもらえる機会を得た。

ある生徒が友だちに悪口を言われ、心が大変傷つき、ショックを受けて泣いているということであった。

その場でのカウンセリングから学んだことは、その問題点や反省点についてはカウンセラーが一方向的に「説教」をしたり、答えを与えるのではなく、なぜそんなことをしたのか、なぜそんなことになったのかを常に本人に考えさせ、本人に気づくかせ、そして本人の口で言わせる、カウンセラーのその「待ち」の姿勢であり、それはした者に対してもされた者に対しても常に冷静に見守る姿勢であったということである。

また、必要に応じて客観的な情報を周りに居合わせた生徒から収集したり、それらの生徒を同席させ、話をさせたりする場合もあるという。

私の場合はこの「待ち」の姿勢や常に冷静に見守る姿勢を忘れがちであるので、心して今後の指導に生かしていきたい。

### (2) 学校と保護者・関係所機関との連携による青少年の健全育成について

#### ① 学校と保護者との連携による青少年の健全育成について

青少年の健全育成のための組織についてはよくは分からなかったが、多くのボランティア活動によって学校が支えられていることは確かなことである。保護者のみなさんの意識に『おらが村の学校』という考えがしっかりあるのではないのでしょうか。人的・物的・金銭的な諸々の支援をすることが学校の教育環境をよくし、そのことが子どもたちの健全育成につながると…。

#### ② 非行防止の方策と非行・問題行動に対する直接的な指導について

##### 1 校内に常駐のポリスが

アメリカでは非行・問題行動・怠学等々については州法によってかなり厳しい規定がある。

また、日本では考えられないことだが、校内にポリスが常駐していて、何か大きな問題が発生するとポリスがその起こした生徒を逮捕することもある。現に、以前に逮捕された男の子が母親とともに来校したという場面を見た。これらのことは非行防止策というより抑止的效果をねらった策といった方がいいかも知れないが…。

日本の少年犯罪も多発化、凶悪化、低年齢化の傾向

にあり、近年ますますその傾向が著しくなってきた。今、校内にポリスが常駐ということでもなく、それに替わるような策を講じる必要があると考えます。

## 2 非行・問題行動・怠学等の程度によっては校長が自ら指導を

非行を未然に防ぐということは、『いつも子どもたちのことを気にかけて、声かけをし、しっかり見守っている』ということになるのではないかと思います。

アメリカでは校長先生が先頭に立って生徒に声かけをし、愛情を持って子どもにかかわっている。そして、非行・問題行動・怠学等のひどいケースについても校長が自ら指導を行なっている。私が1週間研修させてもらったトップセイル・ミドルの校長先生がおっしゃっていたのは「生徒指導は校長の仕事である」と。

## ③ 事情のある家庭・生徒に対する学校・教師やソーシャルワーカーによる支援活動

この目でしっかり確かめる機会があまりなかったが、

学校・教師がその生徒の家庭事情をよく把握し、事情のある家庭・生徒には学校・教師が援助（金銭的なことも含めて）をしたり、ソーシャルワーカーにかかわってもらうなど、学校・教育委員会・家庭・地域社会の連携はいろいろされているようです。

特に、ソーシャルワーカーについてはひとりが数校を担当し、電話一本で直ぐに来校してくれる、あるいは特に学校からの要請がなくても日々巡回してくれるとのこと。

この様なシステムは日本でも取り入れるべきであると考えます。

## おわりに

今回のグローバル・パートナーシップ・スクールの研修で学んだことを日々の教育実践に生かすとともに今後もインターネット等を通じていろいろな交流を深めていきたい。



## グローバル・パートナーシップの展開

—Hoggard High School, Laney High School, New Hanover High Schoolの訪問を通して—

大阪教育大学教育学部附属高等学校平野校舎 教諭 川井悦子

### (1) 学校組織と運営を通してみえてくる国際理解

アメリカでは、学校組織が明確化され、それが完全に実行されているところに驚きを感じている。日本の学校であれば、決定はされていても、十分には消化されていないケースが多い。また、仕事内容が明確になっているため、それぞれの持ち場で、自分のすべきことを果たさなければ、仕事が進まないようになっているように思える。特に、授業の出欠管理のために、職員がいることに感心した。学校警備については、今まで全く考えていなかったような警備であった。授業中も、警備の人が廊下を巡回し、下校時には、校舎出口で、副校長が立っているという様子であった。日本では、到底、考えられないことである。管理サイドは、教師の管理だけでなく、生徒の管理も行っているので、教科担当の教師は、自分の教える教科に、専念できるのである。管理職になるためには、実習期間があり、教師の場合と同じである。高校の場合、生徒指導をしっかりしていくことが、学力の向上につながると言われていたが、本当だろうか。日本の学校の場合は、クラス中心でHR指導が教科指導をしている教師になるからだろうか。生徒のためを考えると、それぞれの立場で、違う人から指導される方が、効果的であるからだろうか。この点は、熟慮すべきことかと思われる。

### (2) 授業を通してみえてくる国際理解

日本の授業は、クラス全員・学年全体が同じ授業内容であるというところに、アメリカとの大きな違いを感じる。アメリカでは、一定の基準があり、それを越えないと、次の段階に進めないということである。上を目指す人には、大学レベルの授業が用意されており、生徒も興味を持ちながら、授業に臨むので、その成果は大きいであろう。日本の現状は、個性の尊重といいながら、画一的な授業になっているケースがほとんどである。これは一クラスの人数に、大きな原因があると思われる。指導内容の序列化が、教師の中で、十分なされていないケースが、多いのではなかろうか。アメリカでは、プログラム化された問題を、コンピュー

ターを使って進めていた授業も見せてもらった。誰が教えても、同じ内容になるので、利点はあるが、教師の指導に現れる個性を見て、生徒の個性も、創り上げられていくものではないかと思われる。

運動施設については、日本の側から見ると、羨ましい限りである。しかし、アメリカ側にしては、ずいぶん、不満があるようであった。あれだけの施設を使えるのなら、工夫をすれば、もっと、多様な授業が、組めるように思える。日本の状況を見れば、文句を言えなくなるであろうと思われる。

90分授業が、毎日、半期間続くということについて、数人の生徒に聞いてみたが、日本の方式よりも良いということであった。教師の側から言うと、90分は長すぎるという教科も多いと言われていた。1時間の長さについては、本校でも、問題になっていることから、今後、単位数と絡めて、熟慮すべき内容かと思われる。

### (3) 今後の課題

アメリカの学校より、日本にはない、いろいろな面を見てきた。今、中等学校という話が持ち上がっているが、ただ、二つの学校をくっつけるだけで、問題の解決が出来るのであろうか。子供達が早くから教育されていることを考慮して根本から変えていくべきであろうと思う。その点で、アメリカの学校制度は見習うべきであると言える。平野地区は、幼稚園から高校まで同じ敷地にあるので、公立ではできない計画をすべきである。それぞれの校種の先生の特性を生かし、生徒が自分にあったレベルの授業が受けることができるようにすることが可能である。そのためには、それぞれの授業の内容を明確化し、授業の序列化をする必要がある。

幼稚園最終学年と小学校1～4年、小学校5、6年と中学校1、2年、中学校3年と高校1～3年を一つのまとまりとする。4年間あれば、少しは、ゆとりができてくるし、高校1年のレベルの低い生徒は、中学の授業を、受けなければいけないこととし、高校も大学の先生が講師に來たりして高度な授業を開講しても

良いのではないかと思う。卒業に必要な単位に幅を持たせるようにすれば、きっと、今よりは、生徒の学力が、伸びると思われる。これも、教師が、しっかりと教材研究をして、授業に臨むことが前提である。

今、日本で言われている教育改革は、スタイルの変革が主であって、生徒が、学校で、能力に応じて、十分理解できる授業展開のための改革は、非常に少ない。生徒は、浪人して、予備校で、初めて勉強の仕方がよくわかったとか、自分のよく解っていないところをはっきりと指摘され、勉強すべきところを指示してくれる

ので、どんどん学力がついていき、おもしろくなって、勉強する意欲がでてくると言っている。このようなことより、学校における教師の指導方法・指導内容を変えていく必要があるので、その点においては、アメリカにおける到達度別授業を見習うべきであろう。

学校で、十分、解る授業を進めていけば、登校拒否になる生徒も少なくなっていくだろうと思える。

今、本学附属池田小学校で起こった事件を考えると、アメリカの学校に学ぶところは多いであろう。

# 本校ダンス授業の米国での反応と課題

## —大阪教育大学附属高等学校平野校舎と 米国Hoggard High School, Laney High Schoolの比較を通して—

大阪教育大学教育学部附属高等学校平野校舎 教諭 川井悦子

### (1) はじめに

大阪教育大学附属高等学校平野校舎では、臨時教育審議会の答申を受けて、1990年より「社会の変化に主体的に対応できる生徒の育成」というテーマで研究を進めてきた。我が国の教育は著しく普及し、社会の発展と国民生活や文化の向上に寄与してきたという成果の反面、受験教育の過熱や、いじめ、登校拒否、校内暴力、青少年非行などの教育荒廃を生むとともに、創造性、個性の尊重、高等教育の内容、国際性などの面における種々の問題を内包し、制度の画一性、硬直性による弊害を生じるに至っていると分析され、また、その教育が、自ら判断する能力や創造力の伸長が妨げられ、個性のない、同じような型の人間を作りすぎていること、国際化への対応が遅れていることなどの問題点も指摘し、現代の社会では、物質中心主義で心が不在なこと、実証や数量化可能なものの偏重、崇高なものへの畏敬の念の欠如、自然とのふれあいの希薄化、生命を尊重する心の不足、直接体験の機会の減少、価値観の多様化などの傾向が見られると言われている。

フォール報告より、変化の激しい先行き不透明な未来社会で、主体的に対応できる人間とは、「ある」様式をとり、変化に振り回されるのではなく、何ものにもこだわらず、何ものにも制約されず、変化を恐れず、絶えず成長する人間ということになる。そのためには、生涯にわたる人間形成の土台ともなる基礎的・基本的な内容の徹底を図るとともに、社会の変化や発展の中で自らが主体的に学ぶ意志、態度、能力を育てていくことが大切である。臨教審の答申のなかの自ら学ぶ目標を定め、主体的に学習できる能力というキーワードに焦点を当て、前回は、器械運動の領域を取り上げた。その後、文化と伝統の尊重とともに文化の発展に貢献する、国際社会に生きる日本人としての自覚と責任というキーワードより、ダンスの領域に、研究を進めている。

### (2) 研究の概要

#### ① 今までの経過について

本校生徒は、以前に行ったアンケート結果によると、日本人が、海外で活躍することについては、経済面よりも文化やボランティア面での活躍を強く望んでいる。1990年は、生徒の希望するダンスを、授業で、行わせてみた。すると、日本の踊りは全くなかった。まず、自国の文化を知り、何か一つでも、紹介できることが大切だと感じ、日本の踊りとして、民謡をダンス授業で取り上げることを考えた。しかし、伝統文化でありながら、文献は、絶版になっているものや、ほとんどない状態であった。幸い、観光協会や市役所の力をお借りして授業開始にこぎつけた。

最初、生徒は、全く、希望しなかったように、乗り気ではなかった。しかし、授業が進むにつれて、だんだん興味が湧いてきて、授業だけでなく、文化祭でも舞台発表をしてみようと思う生徒が多くなってきた。そして、先輩達が踊っていたのを知っているので、毎年踊り、今に至っている。

大学に進学した卒業生が、留学生との交流に、授業で使った踊りを使いたいと相談に来たりすることより、国際化という観点からこの授業が生きてきているように思える。

#### ② 調査内容

授業での踊りをビデオテープにとり、持参した。その内容は日本民謡数種・タップダンス・フラダンス・フラメンコ・ブチェチュム・創作太鼓おどりとした。Hoggard High School のスポーツの歴史のクラスとLaney High Schoolのダンスのクラスでビデオを見てもらった。その後、日本民謡を見ての印象、タップダンス・フラダンスを見ての印象を自由に書いてもらった。その感想文を6月から始まる2年生女子のダンス授業で読ませ、その感想も書いてもらった。

③ 現地調査の日程

日 時	場 所	内 容	関 係 者
3/26 (月) 8:00 9:30 10:00 10:05 10:35 10:55 11:15 11:30 11:50 13:45 14:10 14:30 15:10	Hoggard High School	校長の挨拶 校内世話係の紹介 英文学・ドラマの授業見学 副校長の挨拶 ホームルームの見学 教育実習生と話 歴史の授業見学 数学の授業見学 インターネットの授業見学 カウンセラーと話 出席管理室・保健室見学 ナースと話 スポーツの歴史の授業説明と ダンスアンケート依頼 体育館体育の授業見学 テニス体育の授業見学・質問 サッカー体育の授業見学・質問	S. Urban L. Southerlando  B. Bray  V. Wheelless M. Whitehead  W. Boyette J. Teller
3/27 (火) 9:00  11:00	Laney High School	化学の授業見学 生物の授業見学 海洋学の授業見学 世界史の授業見学 ダンスの授業見学 音楽の授業見学 新聞製作の生徒よりの質問 体育について話を聞く 造形の授業見学 数学の授業見学 ダンスアンケートの依頼	R. Sutton  M. Carr
3/28 (水) 10:00 10:20 10:40 10:50 11:00 14:00 16:30 17:00	Hoggard High School	世界史の授業で生徒より日本についての 質問 メディアの授業見学 避難訓練 工芸の授業見学 美術の授業見学 コンピューターの授業見学 保健の授業見学 教官会議 歓迎会	R. Parryl    K. Smith
3/29 (木) 9:00 10:15 10:30 11:30 14:00 14:30 15:00	Hoggard High School	体育について話を聞く 解剖の授業見学 低学力生徒の授業見学 障害児の授業見学 OTCプログラムの授業 エンジニアリングの授業見学 テニスについて話を聞く 体育授業のビデオを見る テニスの実演	K. Smith    C. Pridgen K. Smith C. Pridgen



### (3) 研究の結果と考察

ダンスのクラスでは、踊りの由来などを説明して見てもらうつもりであったが、先生が不在であったため、生徒がテープを見るのみとなってしまった。そのため、十分な理解がされていない点もあるが、興味がある、教養がある、おもしろい、というような感想を書いていた。歴史のクラスでは、体育授業ではない、着物(浴衣)がいい、太鼓がいい、ドラマの授業内容だ、というような感想で、そのなかに物語性を感じ取っていたようである。授業担当者が、日本で2年程度、生活をした経験があり、生徒に十分な説明をしてくれたからではないかと思われる。

アメリカの生徒の感想を読んで、本校生は、アメリカの高校生が日本の踊りに非常に興味を持っていることに驚き、アメリカでのダンス授業への関心が、より一層強くなったようである。学校でのダンス授業をお互いに見たり、教え合ったりしてみたく思っているようである。生徒は、それぞれ、日本の見せたい部分を考えているようである。自国の踊りを紹介することは異文化理解をする上で、生徒が喜ぶ一つの方法かと思われる。

アメリカでは、フラダンスは、一つの島の踊りという程度で、日本人ほどには関心がないということもわかった。このことは、日本人でありながら、日本の踊りをあまり知らないことと同じだと思う。

授業の前に、感想文を読ませたことで、生徒達の日本の踊りに対する取り組みが、例年とは、少し変わっていたように思える。ただ、授業で踊るだけでなく、自分たちのしていることを他人に教え、教えられることが、いかに大切かと言うことが、わかったような気がする。

### (4) 今後の展望

国際交流をすることは、見聞を広めるだけでなく、生徒の授業に対する取り組み方に、大きな変化をもたらせたと言える。目的意識をはっきりと持たせ、学習意欲を高めることによって、よりよい授業が出来るように思える。

新しい踊りを増やしていくことは、大変なことである。しかし、授業として取り上げ易いものを探し、生徒に、踊りの由来を英語に翻訳させ、交流の機会を持つことは、彼らにとって、非常の大きな意味をもつことになると思われる。

本校の生徒達も、アメリカの生徒の感想文を読んで、アートとしてのダンス授業に、非常に興味を持ち、授業を見てみたいと思っている。

### (5) おわりに

総合的な学習が始まろうとしているが、取り立てて何かをするのではなく、何かをしているうちに、だんだんと、輪が広がっていくものである。

今回の計画も、体育だけに留まらず、交流をするとなると、他のいろいろな分野の学習が必要になってくる。生徒が、自ら伝えたいと思うことを学習し、準備していくことが、本当の意味での総合的な学習といえるのではないかと思う。

お世話になったM. Whitehead・S. Urban先生と、6月末に、大阪で食事を共にした際、体育の本音の話が出ていた。管理サイドは、毎日の授業内容より、看板になる人を選び、生徒は、学習意欲を無くしていくということであった。どこの国も同じだという感を持つと共に、日本の学校の問題点をも、指摘されているようであった。

## グローバル・パートナーシップの展開

### —J. T. Hoggard High SchoolとE. A. Laney High Schoolの訪問を通して—

大阪府立守口北高校 教諭 植田 玲子

現在勤務している大阪府立守口北高校は平成14年4月より大阪府立守口高校と統合され、総合学科の学校に変わろうとしている。新高校開校に向けていろいろな新たな事柄に取り組んでおり、その中のひとつの課題が「国際交流・異文化理解」である。そのために恒常的に交流できる海外の高校が必要なのだ。そこでこのグローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトでできるだけ多くのノースカロライナの高校の教師や生徒に出会って、日本に対する興味を深めて、将

来的に姉妹校提携ができるような方向性を探りたいという思いを胸に日本を出発した。

約2週間のノースカロライナ滞在のうちJ.T. Hoggard High Schoolに3日、E. A. Laney High Schoolに1日訪問し、多くの教師や生徒に出会えた。E. A. Laney High SchoolのNewspaperの授業では生徒からインタビューを受け、次のように学校新聞の記事となった。訪問の様子がよくわかるので全文を引用する。

#### **Japanese Teachers Discover International Difference, Similarities**

Japanese teachers Eiji Morita, Reiko Ueda and Etsuko Kawai visited Laney High School last week in an effort to learn about the American school culture. Their visit was sponsored by The Global Partnership School Project, which aims to strengthen cultural relationship between Japan and America.

Their one-day visit to Laney High school encompassed visits to classes involving Physical Education, math, and history. According to Ueda, one of the most interesting aspects of Laney High School was the Arts building and theater, both of which are not common place in the Japanese schools.

Ueda, an English teacher in Japan, added that Japanese curriculum is "very similar but Japan does not have AP classes, marketing, ROTC, drama or yearbook." Her counterpart, Etsuko Kawai, a physical education, added that physical education classes are similar, but Laney students take a "longer time to train and exercise."

The most noted difference between Laney High School and Japan that the visiting teachers are noted was the style of instruction used by the teachers. Students in Japan must "sit forward and listen to teachers," according to Ueda. Because of this instructional difference, Ueda added, "American students seem more happy and free."

Another element noted by the Japanese visitors that might have influenced the feeling of freedom among American students was the absence of school uniforms at Laney High School. Ueda commented, "Uniforms are for equality... so that families who are rich or poor can seem equal. Also, Japanese teachers can control students more."

Though the educational culture appears different, students from both countries enjoy out-of-school activities. Much like teenagers at Laney High School, Japanese students still find time for recreation. Students go to teen clubs, listen to music, and begin dating near the age 16 or 17.

Though the Japanese goal of the Global Partnership Schools Project has been met teachers and those who met with them during their visit noted several differences, both parties walked away with a better understanding of the others' culture.

E. A. Laney High Schoolにはわずか1日の訪問であったが、A F J R O T C (Air Force Junior Reserve

Officer Training Corps) という日本では見られない空軍予備隊(?)のような授業の様子や素晴らしい芸術

棟とそこで行われているとてもレベルの高い芸術の授業なども見学できた。

Hoggard High Schoolでは、3日間もの間いろいろな授業を見学させていただいたが、「何か質問は」という声がかかればあちこちから質問がとんできて、南部訛りの英語に慣れるまでは聞き取るのが大変だった。質問の多くは「学校は何時から何時まで?」「長期の休暇はいつ?」「体育の授業ではどんな種目があるの?」「通学方法は?」「高校生がタバコを吸ったらどんな処分があるの?」など高校生活に関するもので、実際に日本の学校の制服(お土産として持参した)を教室で見せたときにはとても興味を示してくれた。意外にもアメリカの高校生は制服によいイメージを持っているようだ。またいくつかのクラスで「相撲は見たことがある?」という質問があり、日本といえば「相撲」なのかなとこれも意外だった。Hoggard High Schoolではこのほかに20名ほどの生徒に生活実態や高校生活に関するアンケートに答えてもらったり、数名の生徒にインタビューさせてもらって高校生の実態について少し知ることができた。また「日本に興味がある」という生徒がやってきていろいろ話しをしたが、「大阪」という地名すら知らないし、中国と混同していることもあったりで、ちょっとビックリ。でも「新しいものと伝統を大切にす国なので日本に興味があるのだ」という彼の言葉で、日本人として忘れていた大切な何かを思い出した気がする。

いずれの高校も(他に訪問した小・中・高校も同様だったが)日本人教師をととても温かく迎えて下さり、どの教室を覗いても授業を中断してまでも歓迎されて感激した。そして教員の時間割や生徒に配布するHandbookや教科書に至るまで、欲しいなと思う資料をたくさん用意して下さい大変参考になっている。創立25周年を迎えるE. A. Laney High SchoolではSchool

Goods(校名入りのペン立て、鉛筆、メモ帳、ペナント、バッジ)を頂いて文化の違いに少し驚いたりもした。

この訪問から3ヶ月後、6月25日から28日までの4日間E. A. Laney High SchoolからBrenda Olson先生を守口北高校にお迎えし、授業やクラブ活動を通じていろいろな形で教員や生徒達と交流して頂いた。授業参観をして生徒の質問を受けるというアメリカの高校と同じ形をとったが、やはり日本の生徒は恥ずかしいさと英語に対する自信のなさが原因だと思うがなかなか質問が出ない。そこで訪問最終日の放課後に、ESSクラブのメンバーを中心に有志が集まってBrenda Olson先生を囲んで交流する機会を設定した。まず、E. A. Laney High Schoolの学校紹介のビデオを見せていただいてから生徒に自由に質問させた。そうするとアメリカの高校生に負けないほどかなり活発に質問が出て、生徒達はアメリカの高校生や高校生活に大変興味を持ち、直接アメリカの高校生と交流したいと希望する生徒がかなりいた。そこで、今後日米の生徒同士がEメールなどを利用して交流できるように協力し合うことを約束して短い4日の訪問が終わった。

Brenda Olson先生に交流を希望する日本の高校生のリストをお渡し、この8月から始まる新学期にご自分のクラスで紹介し、学年・性別等考慮して交流相手を決め文通などを始めるという段取りになっている。今後はこの交流が一過性のものにならないよう守口北高校(及び新高校)とE. A. Laney High Schoolの姉妹校提携の締結に向けて具体的な手続を行っていかねばならないと考えている。既に姉妹校提携を結ばれたグローバル・パートナーシップ・プロジェクト参加校の例に倣って、コーディネーターの先生方からのご援助を頂きながら手続を進めていきたい。今後ともご支援ご助言を賜りますようよろしくお願い致します。

## アメリカの高校を訪問してアメリカの高校と高校生の実情を知る

大阪府立守口北高校 教諭 植田 玲子

### (1) はじめに

高校で英語を教えて23年目になるが、海外の高校・高校生の実態については書籍や映像あるいは外国人英語助手の話を通して知っているだけで実際に高校を訪問したことがなかった。今回のグローバル・パートナーシップ・プロジェクトによるノースカロライナ州の高校訪問を通じて、アメリカの高校のすべてをとにかく何でも直接触れてみよう、そして参考になる点はすべて日本に持ち帰ろうという少々漠然としてはいるがずいぶん欲張りな目的でこの研修に参加した。いろいろな場面を観察して、当初の期待以上の発見があった。その内容を以下に述べてみたい。

### (2) 研究の概要

#### ① 校務運営の方法

日本の高校では主に学級担任と教科担当が生徒に関わるすべての業務を行っているが、アメリカではどのように業務を分担しているのかを調査した。

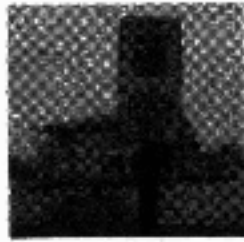

#### ② 生徒が主体となる学習の方法

新学習指導要領にある「総合的な学習」の参考になるような、「生徒の生きる力を育み、個人の能力を伸ばす」ための授業や設備などを見学した。

#### ③ 日米高校生の生活実態と意識調査

現在勤務している高校で行ったアンケート調査と同様のアンケートをアメリカで実施し、日米の高校生の類似点・相違点を探った。

### ④ 現地調査の日程

日 時	場 所	内 容	備 考
3月24日 (土)	移動	12時間のフライトの後、Detroit空港に到着。現地時間午後4時過ぎ。気温0度。国内線に乗り継いでRaleighへ。午後7時着。Wilmingtonへ向かう途中夕食。予想通り量が多い。	Dr. Brad Walker
3月25日 (日)	Wilmington	午後Wrightsvill Beachへ。海岸の駐車場には障害者用の区画がありそこに健常者が駐車すると「最高100ドルの罰金」という標識あり。障害者を大事にする気持ちの現れ？その後Wilmington大学構内など案内していただく。敷地は広大で緑が多く美しい。	Dr. Brad Walker 
3月26日 (月)	Hoggard High School	メディアセンターなど施設見学（始業前から生徒達が調べもの等している） HR見学（成績表を配布するために特別に行われた。毎日行われるのではない） さまざまな授業見学。その一つはテレクラスで、Laney, New Hanover, Hoggardの3校80人の生徒に対してHoggardの教師1人がテレビを通して授業を行っていた。 保健室・カウンセラー室・Attendance Office（出席関係の業務を行う）・School Police等見学及びインタビュー	Ms Celesta Woodward (Media coordinator) Mr. Scott Urban (English teacher) Mr. Marc Whitehead (History teacher) 



<p>3月27日 (火)</p>	<p>Laney High School</p>	<p>登校風景見学(副校長はトランシーバーを持ちあちこち校舎内を歩き回る。約2000人の生徒たちがスクールバスや自家用車で一斉に来る)全州共通のEnglish IIという英語のテスト当日なので教師は緊張気味。 学校新聞のインタビューを受ける 芸術棟など施設見学・授業見学 カフェテリアを初めて利用</p>	<p>Ms. Low Cannon (a retired librarian) Ms. Brenda Olson (History and religion)</p>
<p>3月28日 (水)</p>	<p>Hoggard High School</p>	<p>校内テレビ放送の作成現場見学(毎日1時間目に作成後一時間目終了前の7分間全校に放送)授業見学(生徒の質問に答える。お土産に持っていった制服など日本の高校生に大いに興味を示してくれた) 生徒へアンケートおよびインタビュー 避難訓練に遭遇(月に1回。天候を考えて予告なしに行われるということだったが生徒は速やかに避難していた。点呼はない。全員避難したかどうかは副校長などが校内を巡回して確認) 職員会議見学後中庭でレセプション</p>	<p>Ms. Roger Darryl Ms. Celesta Woodward</p> 
<p>3月29日 (木)</p>	<p>Hoggard High School</p>	<p>日本にはないタイプの授業も見学 NOVE NET(中退した生徒が戻ってきてもOK。個別にいろいろな科目を学習し最終段階まですべて合格すると単位が取れて上級学校に進める) 障害児教育(週に1回地域の協力を得て校外に出て実生活に役立つことを学ぶプログラムが用意されている:路線バスに乗って乗り換えを経験する、レストランに昼食を食べに行くなど。1週間後のアゼリアフェスティバルに向けてchoreographyの練習や、歌を覚えてさせていた。一語一語読ませ(スペルも)、写させ、1節ずつ覚えさせていた。全員と個人と根気よく教えていた。生徒9人、先生1人、アシスタント1人、生徒アシスタント1人) AP生物の授業では猫の解剖中 夜UNCWにてレセプション</p>	<p>Mr. Marc Whitehead Ms. Celesta Woodward</p>  <p>ROTC</p>  <p>猫の解剖</p>
<p>3月30日 (金)</p>	<p>Holly Tree Elementary School Willston Middle School. New Hanover HS</p>	<p>小学校・中学校ともコンピューター室やカウンセリング室など高校同様充実している。 New Hanover HSは地域で一番古い高校なので車椅子に対応できる設備を整えるなど改装中。大学進学希望者のためのThe Lyceumという英語・数学・理科・社会の特別講座があり理科実験室などの施設も特別に設けられていた。 夜Fig Pickingに招待される。</p>	<p>Dr. Brad Walker Ms. Lou Cannon</p> 

3月31日 (土)	Host Family	Middle SchoolのカウンセラーPattさん宅にホームステイ 買い物・地元の美術館などへ連れて行っていただく。	Ms. Brenda Olson 
4月1日 (日)	移動	この日からDaylight Saving Timeとなり1時間時計を進める。 Raleighへ移動 ほぼ徹夜でSummery Meetingの準備。	
4月2日 (月)	Raleigh	Summery Meeting 各地区での観察の発表。同じノースカロライナの学校を訪問したにもかかわらず、各地区の観察の違いに改めて驚いた。ほかの地区の観察を合わせて3倍学校観察をした感じ。	
4月3日 (日)	Exploris Middle School  Exploris Museum Museum of Natural Science	チャータースクール 公立学校と違い独自のカリキュラムで教育が行われている。生徒が学校を案内してくれたが、質問に対する受け答え方や態度は中学生とは思えないしっかりしたものだった。 Wilmingtonに滞在した時話題になった数年前の台風の被害を記録したビデオが上映されていて様子がよくわかった。	
4月4日 (水)	移動	RaleighからDetroit経由 Osakaへ翌日帰国	

### (3) 研究の結果と考察

#### ① 校務運営の方法

もっとも印象的だったことはやはり生徒に関わるスタッフが多様であるということだ。

校長・副校長(複数)・普通の教員・養護教諭以外に、カウンセラー(生徒指導担当・進路指導担当多数)、スクールポリス、ソーシャルワーカーが場面に応じて生徒の指導に関わっている。

また、例えば副校長は生徒の登校時や避難訓練時にトランシーバーを持って校内を巡回するであるとか、生徒が授業でメディアセンターを利用する際に司書が資料の提供や指導に教科担当の教師以上の役割を果たしているなど、同じ名称でも仕事の領域が異なる職種もある。当然放課後クラブ活動を指導するのも教員の仕事ではない。

日本では、現在1人の教師が教科指導・生徒指導・

進路指導・クラブ指導・生徒相談、時には保護者からの子供の素行や学費についての相談など多様な業務を行っている。最近では「スクールカウンセラー」などの名称で、心理学的なカウンセリングの専門家が週に1回程度学校に勤務するようになり、かつてに比べれば大きな進歩である。

生徒を取り巻く状況が複雑化する中で、スクールカウンセラーのように、教科指導以外の問題についてはその分野の専門家が学校に常駐するという点において、ノースカロライナの教育に学ぶところは多いと感じた。但し機械的に分業化すると教師と生徒の関係が希薄になるという危惧もある。ノースカロライナの高校で、一日の授業が終わると生徒と同時に学校を出る教師の姿を目にしたが、そういう教師は授業以外でどのように生徒に関わっているのか少し疑問に思っている。この点については今後の交流を通じてたずねてみたい。

## ② 生徒が主体となる学習の方法

Exploris Middle SchoolでThemeという時間に製作したホロコーストをテーマにした作品を見学する機会があった。ここでは、毎日1 periodの時間をThemeの授業に充て、学期初めに決めたテーマに関して教科の枠を超えてさまざまな手法で学習を進めているとのことだったが、実際の作品もさまざまな観点から製作されていた。Thematic Studiesという呼び方ではなくてもあるテーマに関して各生徒が独自に問題解決に取り組む姿は訪問した小学校・中学校・高校の多くで観察できた。生徒の問題解決に大きな役割を演じているのは各学校に完備されているコンピューターである。小・中・高校ともメディアセンターはもちろん各教室にも複数のコンピューターが設置されており、高校では数学や建築の授業で使用されるのは言うまでもなく、例えば美術の授業で陶芸など創作をしている生徒の隣でインターネットを使ってワシントン国立美術館のHPで調べものをしているというような光景がさまざまなクラスで見られた。また英語の授業では、文章や写真などを交えた「自分史」をパワーポイントを使って作成し、他の生徒の前で発表するのを見学したが、個人的でそれぞれ工夫が凝らされており、自分の授業でも取り入れたいと思った。

実際にいろいろな学校を訪問してみて最も参考になったのは、高校における「生きる力を育むための多様な生徒に対応した授業」である。その授業の内容は、直接職業に結びつくものであったり、大学進学に有利なものであったり、将来設計に大いに役に立つと思われる。

中でも「これが高校の授業?!!!」と目を見張ったのは「映像」の授業である。この授業は毎日1時間目があり、連絡等を含む学校ニュース番組を制作し1時間目終了後全校放送するというものだ。全校生徒は教室や廊下にあるモニターで番組を見るようになっており、日本のSHRの役割を果たしている。映像の授業では生徒は放送に関わるすべての役割を全員が分担し、原稿作成からリハーサル、録画、放送まで、担当教員のアドバイスを織り交ぜて、時には息の詰まるような緊張感の中で作業が進められて行く。生徒が7名と少ないので一人一人が能動的に考えて行動しなければ番組が成功しない。この「映像」と同様、授業の中で取材・撮影・編集・校正などの技術を身に付け、その成果を

「学校年鑑」「学校新聞」など具体的な形であらわすことのできる科目を通じて生徒たちはより専門的・実践的な力を身につけることができる。

OJT (On the job training: 学校外で実際に労働体験) という科目や、メディアセンターで司書の仕事の補佐や障害者クラスのアシスタントなどをすることにより、それが単位として認定される制度がある。こういう経験を通じて将来の職業をより深く考えるきっかけになるかもしれない。また、単位を取って高校を卒業後入隊すればより高い収入が保証されるというAFJROTCという科目があり、授業を見学させていただいたが、授業の厳しさ・生徒の真剣さに、私たちも身の引き締まる思いがした。

また一方で、成績が優秀で大学進学を目指す生徒向けにはAdvanced Placementなどの名称のついた上級クラスがあり、大学の単位として認められるものもある。

## ③ 日米高校生の生活実態と意識調査

昨年守口北高校で全校生徒の生活実態・意識について調査を行った。その調査の結果、次のような傾向があることがわかった。(あまり具体的に公表できない部分もあるが、ご了承いただきたい)

- 1 睡眠時間 6～7時間。就寝時間12時過ぎ。
- 2 朝食抜き かなり多い
- 3 放課後の過ごし方  
勉強・アルバイト・カラオケ・TV・ゲーム・友人と遊ぶ、電話ではなす
- 4 いじめの経験 1年生でほんの少し
- 5 校則について  
制服着用、染髪・ピアス等の禁止にはかなり不満あり
- 6 将来の進路  
1年生は「未定」の者がとても多い

この調査結果と比較してアメリカの高校生の実態を知りたいと意気込んでアンケートを取ってみた。対象は10th gradeの22名の生徒たちでアンケート項目にはかなりしっかり答えてくれた。特に興味深い回答を書いてくれた生徒にはその後インタビューをしてより具体的な話を聞いて参考になった。ただし回答数が22ととても少ないので、これを一般化することはできないので、ここでは傾向を述べるだけにとどめる。

- 1 睡眠時間 7時間から8時間

就寝時間10時から11時が多い

- 2 朝食 ほとんどが摂っている
- 3 放課後の過ごし方  
クラブ・チーム活動 (多数)・働く (少数)・友人と遊ぶ、電話で話す・宿題
- 4 いじめの経験 高校では稀
- 5 校則  
服装規定について不満をもつ生徒が多い一方それを当然とする女子も同数ぐらいいる。
- 6 将来の進路  
全員が「大学進学」その後医学系の職業につくための教育を受けたいという生徒多い。

特に6の回答を見ると、このアンケートの回答者達がアメリカの平均的な高校生なのかどうか疑問に思われる。実は我が校の解答も平均的な日本の高校生とも言いがたい面がある。今後も日米の高校生に同じようなアンケートを取る機会を持ち、上記の解答が平均的なものか否か検討してみたい。しかしこのアンケートとその後の数名の生徒に対するインタビューを通じて、日本の方が遅くまで起きているということとアメリカの方が自分の将来についてかなり具体的な展望を持っているということを強く感じた。

#### (4) 今後の展望

今回の訪問での最も大きな収穫は、日本の一歩先を行く「総合学科」的なアメリカの高校の実態に触れたことである。現在の勤務校が普通科から総合学科に変わる時期を迎えるに当たって、いろいろ参考になることが多かった。何よりも「生きる力を育むための多様な生徒に対応した授業」を見学し、少人数クラスで施設・設備の整った中で授業が行われていることが印象

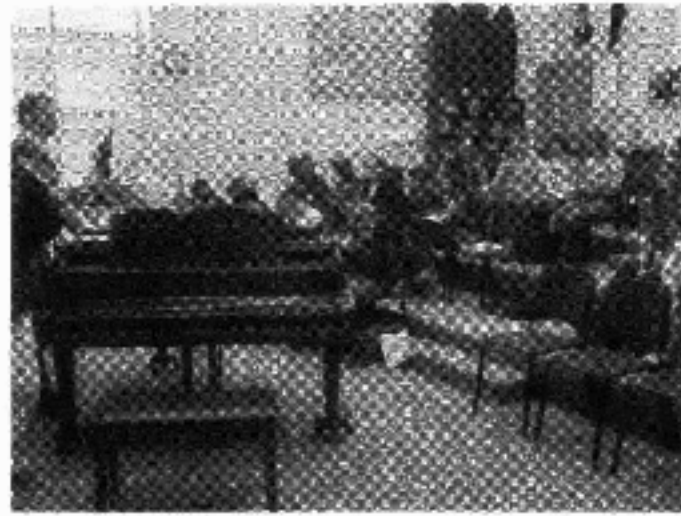
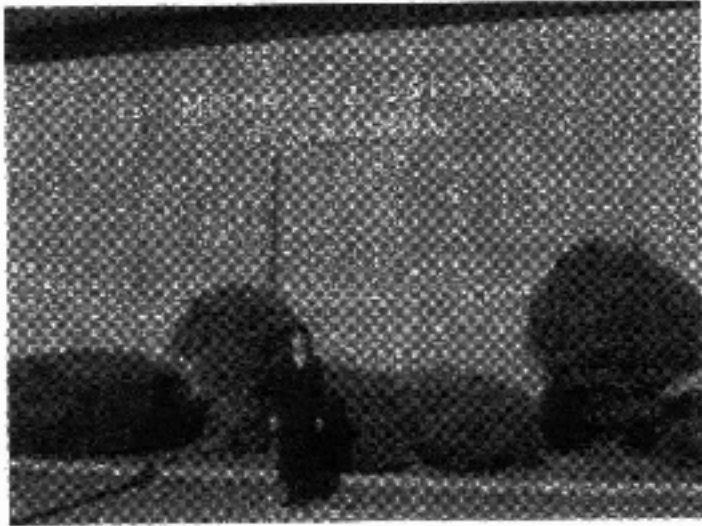
的だった。生徒が幅広い選択肢の中から自分の進路に応じた科目を選ぶ時など、進路担当のカウンセラーが果たす役割が大きいことも想像できた。HR単位で授業を受ける機会が少ないのでAttendance Officeのような機能を持つ仕組みが新校に必要な、など総合学科の高校に応用できることをじっくり考えていきたい。今回の訪問で頂いた資料の中に生徒指導の方針が記載された冊子や成績評価の方法が書かれたプリントなどがあるが、その詳細さには大変驚かされた。これはAccountabilityを重んじる姿勢の現れであろうが、日本の教育にも今後Accountabilityという概念が必要だと思った。今回の訪問ではこのように主に「よい面」だけを見てきたが、今後の交流を通じて「よい面」「悪い面」共に知りたい。

#### (5) 終わりに

事前研修で、そして実際に訪問してみてアメリカの学校教育・教育改革について学ぶ機会を持ち、改めて日本の教育について考えることができた。日本もアメリカもお互い相手を追いかけるように、あるときには「ゆとり」を重視し、またあるときには「学力」を重視するということに大きく揺れながら教育改革が行われてきている。ノースカロライナの教育改革の一環として州統一テストをして各学校を評価し、成績の伸び率が予想よりいい場合はボーナスが支給され、悪い場合は研修を受ける等というシステムもそのうち日本にも取り入れられるのだろうかと思うと複雑な思いもある。しかし教育を国家的課題とするという点では同じであり、今後もよりよい教育を求めてノースカロライナの学校と意見の交流を行っていきたい。



Laney High Schoolでのスナップ



## グローバル・パートナーシップの展開 —ヴァージニア・ウィリアムソン小学校の訪問を通して—

東広島市立御薮宇小学校 教諭 小池 周

### はじめに

私たちは、3月26日から3月29日の4日間、ノースカロライナ州ブランズウィック郡・バージニア・ウィリアムソン小学校を訪問した。

その間、授業参観、教師からの聞き取り、子どもたちとの交流などを通して、様々な貴重な体験をすることができた。

### (1) 授業を通して

授業に関しては、特に学校をあげて、どの学年でも「読む」ということに重点が置かれ、民間の教材会社が開発したDirect Instruction Reading Programと称されている教材によって学習が進められていた。

それは、コミュニケーション・スキルと呼ばれる一つの技能として取り扱われ、すべての教科の基礎として位置づけられていた。

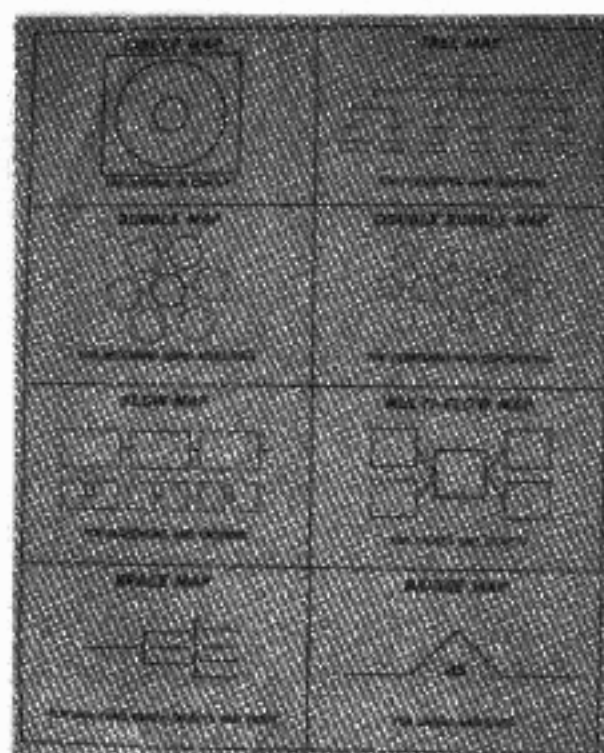
先生がリズムカルに読み、子どもたちがそれを繰り返す。そのことを通して、読むことから内容理解までねらったものであった。

Direct Instructionを導入してから、子どもたちが読むことへの自信をもち、各教科が伸びてきたそうである。

本校でも、今年度から読書タイムを取り入れて毎日朝の5分間を読書の時間にあてている。文字を読むことの時間を保障し、その場を設定することは、特に文字に対して抵抗感を持っていた子どもにとっては、かなりの効果があるのではなかろうか。

次に、どこの学年のどこの教室でも、教室にシンキングマップ (Thinking Maps) と呼ばれる8種類の思考の仕方 (CIRCLE MAP, BUBBLE MAP, DOUBLE BUBBLE MAP, FLOW MAP, BRACE MAP, TREE MAP, MULTI-FLOW MAP, BRIDGE MAP) が図式されて、掲示されていた。これは、幼稚園から段階的に思考の仕方を育てていこうとする試みであり、論理的に物事が考えられる子どもを着実に育てていこうとする印象を受けた。

また、日本でもこのシンキングマップは総合的な学



習などで、大いに役立つものではないかと考えられる。反面、各クラスでは、子どもたちに考えさせる授業というよりは、先生主導型で、講義的な授業が多いように感じられた。

教室環境に関しては、どの教室も色彩豊かで楽しく学習できる雰囲気があり、エアコン等の設備も完備し快適な学習空間となっていた。掲示物は市販のものが多く、教師や児童自身の手作りの掲示物が多い日本とは異なっていた。

授業中に、常に何人かの児童が出入りしていた。それは、遅れている教科については下の学年で学習していたのである。反対に、優秀な子どもは、自分の学年をこえて上の学年で学習をしている姿がみうけられた。能力主義が小学校の段階から徹底していることには驚いた。

図工、体育、音楽などの教科は週1時間程度で、どちらかといえば他の教科に比べて軽視されているような感じをうけた。アメリカの先生の中には、心をより豊かに耕すことのできるこれらの教科をもっと重要視すべきだという意見もあった。日本から持参した図工の作品をみて、多くのアメリカの先生は感銘をうけた様子であった。また、アメリカの子どもたちも、日本の体育の様子を聞いてうらやましがっていた。

版画の作品を見たとき、小学校で彫刻刀を使っても

よいのかという質問には、アメリカのお国事情を垣間見た気がした。

## (2) 学校組織と学校環境から

学校の中では、それぞれの専門的なスタッフがそろっており、設備も充実している。

各クラスには、担任の先生以外にボランティアの先生がおり、主にその先生は宿題や家庭連絡などの事務的な仕事をしていた。アメリカの小学校では、男の先生がほとんど見あたらなかった。男女の特性を活かした教育ができにくいという点で、少なからず子どもの教育に影響を及ぼしているような気がした。理由を尋ねてみると、長期休暇中は給料がないそうで、そのために、男の人はあまりなりたがらないという話であった。

教師が担当する学年も、ある程度固定化されているようで、日本と比較するとかなり違った組織となっていた。

また、学校環境では、図書室やコンピュータールームは、子どもたちが進んで学習したり、くつろいで本を読んだりできる雰囲気があり、図書室は、図書館司書によってきちんと管理されていた。

日本の学校と大きく異なる点は、運動場がないことである。体育は、体育館で行うそうである。決められた休憩時間のない小学校では、運動場や遊具は必要ないのかもしれない。小学校では遊びを通して学ぶことが多いと考えられている日本では、「遊び」に大きな意義を持たせているが、遊びに関する受け止め方が日本とアメリカとは違っていることを感じた。

全体的には、学校と家庭の役割や責任がはっきりしており、学校内でのルールは厳しく、訪問前に私たちが想像していた自由なイメージとは随分違っていた。ルールが守れない子どもには厳しい罰則があり、小さな子どもの時から義務と責任についてきちんと教えられているような気がした。そういう点では、子どもに対してなにかと寛容で、時には家庭の責任まで負われる日本とは随分違っている。

## (3) 姉妹校提携の締結とその経緯

本校とヴァージニア・ウィリアムソン小学校は、昨年度(2000年)6月に、ウィリアムソン小学校のネルソン校長先生をお迎えして、本校で協力校としての調印式をおこなった。それに先立ち3月に、本校職員が、グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトの一員としてウィリアムソン小学校を訪れ、交流をもった。今年度も本校から相手校を訪問し、更に6月にはアメリカから本校へと互いに職員の交流を深めることができた。

## (4) 今後の交流計画と課題

今までは、職員の交流が主であったが、将来的には職員の交流と同時に、子どもたち自身の交流まで発展できればいいと考えている。とりあえず、子どもたちの作品やビデオレターの交流、インターネットを通しての情報交換を進めていく予定である。言葉の問題、時差の問題、経費の問題など課題はたくさんあるが、できることから地道に進めていきたいと考えている。

# 小学校における国際理解教育のあり方

## －日本とアメリカにおける小学校の事例を通して－

東広島市立御蘭字小学校 教諭 小池 周

### (1) はじめに

本校では3年前から国際理解教育に取り組んできている。また、同時に、国際理解教育の一環として英語学習も導入して、異文化理解を図ると同時に、コミュニケーション能力の育成をめざしてきた。

それは、一つは地域の特性として、近くに多くの留学生が在籍している広島大学や、外国からたくさんの研修生が訪れるひろしま国際プラザ（JICA国際協力事業団）があり、それに加え、民間の研究施設や外資系企業などがあること。

また二つ目として、学校の実態の中で、中国からの帰国児童やアジアの国々からの外国籍児童が多く在籍していることなどの理由からである。

私たちは、国際理解教育を進めるにあたって基本的な考え方として、次の4つの視点を大切に実践してきた。

- 1 ふるさとの良さを知り、誇りに思う気持ちを育てる。

- 2 他国の文化などに興味や関心をもち、尊重しようとする広い心を育てる。

- 3 コミュニケーション能力を育てる。

- 4 違いを認め、一人一人をかけがえのない人間として大切にしようとする態度を育てる。

そのような視点を踏まえて、人種のるつぼと言われ、多民族国家であるアメリカの教育を比較・検証し参考にすることで、わたしたちが進めている国際理解教育の課題や成果を再整理し、これからの国際理解教育の方向性をグローバルな視点から再考していく一助としたいと考えている。

### (2) 研究の概要

- ① 総合的な学習と国際理解教育について
- ② 国際理解教育の視点からの考察
- ③ 小学校における外国語学習について
- ④ 国際理解教育における課題について

### ⑤ 現地調査の日程

日 時	場 所	内 容	関係者・関係機関 (所属・所在地・連絡先等)
3/26 (月) 9:00 10:00 14:00	Virginia Williamson Elementary School	体育館で全校による歓迎会 校内巡り 1年生のコンピューターの授業参観	1020 Zion Hill Road Bolivia, N. C. 28422 Tina Child先生 保護者 Pat Smith先生 Betty Miller先生
3/27 (火) 8:15 9:00 10:00 13:00	Virginia Williamson Elementary School	Communication Skillsの授業参観 5年生のスペイン語の授業参観 5年生の算数の授業参観 メキシコから移民してきた子どもに対する英語の授業を参観	1020 Zion Hill Road Bolivia, N. C. 28422 Glenda Scherer先生 Houden先生 Lori Crabtree先生 Gloria先生



3/28 (水)	Virginia Williamson Elementary School		1020 Zion Hill Road Bolivia, N. C. 28422
8:15		図書室で、よくできる子どもたちを集めての内容理解の授業と、学習が遅れている子どもを集めての	
9:00		Direct Instructionの授業を参観 Communication Skillsの授業参観	Patricia Balwanz先生 Sherry Daves先生
10:50		Character Education授業参観	David Ruth先生
12:00		4年生の国際理解教育(社会)の日本についての授業参観	Nona Baker先生
13:00		3年生の算数の授業参観	Sherry Daves先生
3/29 (木)	Virginia Williamson Elementary School		1020 Zion Hill Road Bolivia, N. C. 28422
9:00		「桃太郎」の絵本の読み聞かせ	毛利先生
11:00		教頭先生との懇談	Deanne Meadows教頭先生
14:00		体育館でスイミーの劇の鑑賞	Betty Miller先生
3/30 (金)			
9:00	Williston Middle School	学校訪問	Wilmington
11:00	Holly Tree Elementary School	学校訪問	Wilmington
14:00	UNC-Wilmington	Readingの授業参加	Dr. Brad Walker先生

### (3) 研究の成果と考察

#### ① 総合的な学習と国際理解教育について

今回の訪問で一番驚いたことは、生きる力の大切さが叫ばれ、総合的な学習によってその力をつけていこうとする日本と違って、「基本的な教科に立ち戻れ」というスローガンのもとに、学力向上キャンペーンがおこなわれていたことである。

それは、ABCプランと呼ばれ、Aはアカウンタビリティで、説明責任と訳されるが、いわゆる「どれぐらい力がついたのか」と言うことが、保護者にきちんと説明できるようにすること。Bは、ベイシックサブジェクトの頭文字で、基本的な教科に立ち帰り、それを重点的に教えていこうとする取り組み。Cは、ローカルコントロールの頭文字で、学校が教育政策の決定に積極的に参加しようという取り組みである。

そのことは、わたしが訪問したヴァージニア・ウィリアムソン小学校においても例外ではなく、例えば、昨年度は算数に、今年度はReadingに重点がおかれ、民間の教材会社が開発したDirect Instruction Reading Programと呼ばれている教材によって学習が進められ

ていた。これらは、カリキュラムの中でコミュニケーション・スキルと呼ばれ、一つの技能として取り扱われ、すべての教科の基礎として位置づけられていた。また、子どもの進み具合によっては、5年生でも6年生の内容を学習したり、3年生でも学習が遅れている子どもは2年生の子どもと一緒に学習したりしていた。このように、知識や技能的側面が重視されている傾向は、今の日本の教育の流れから言えば驚きである。

総合的な学習が話題になるにつれて、日本でも基礎的な教科の学力不足を懸念する声が出始めているが、アメリカの現状は将来の日本の姿なのかも知れない。そのほか、3年生以上は修了テストがあり、それに合格させるために教師も大変だそうである。

以上のことから、主に総合的な学習の中で進められている本校の国際理解教育と訪問先の小学校との単純な比較はできなかった。

また、アメリカでの国際理解教育を考えてみたとき、一つの教室の中で、はだの色、目の色、髪の毛の色など、異なった様々な人たちに出会い、そして机を並べて一緒に話や学習できること自体が何よりもまして国

際理解教育だと言えるような思いがした。それに比べて、あえてそのような場面を設定する必要がある日本では、国際理解教育の重要性はますます大きいのではなかろうか。

## ② 国際理解教育の視点からの考察

前述したように、私たちの学校では4つの視点をもって国際理解教育を進めてきた。それらを訪問したヴァージニア・ウィリアムソン小学校と比較・検証しながら考察してみたい。

### ○自国理解について

「ふるさとを大切にすることは、世界を愛する心」という言葉があるように、相手の国を理解しようすれば、まず、自分の住んでいる地域や国のことを理解することが大切になってくる。言い換えると、自分の地域や国に誇りをもつことが大切である。

最近、日本では地域の教育力が見直されてきており、特に総合的な学習などでは、地域を巻きこんだ学習が展開されることが多くなってきた。

訪問した小学校では、毎日始業前にアメリカの国歌が流れていた。子どもの時から自然と自分の国に誇りをもつような教育が行われているような気がした。反面、登下校はスクールバスか自家用車を利用しているので、日本の子どもたちと違って、地域の人たちと触れ合いながら学校の行き帰りができないのは少しさみしい思いがした。先生の話でも、地域との関わりはなかなかもてないそうである。

その代わりに、ウィリアムソン小学校では保護者が積極的にボランティアとして、先生のアシスタントをしたり、いろいろな行事(Cultural Food Fair, Hat Day Celebrationなど)を主催したりしているが、その中で地域とのコミュニケーションを図ろうとしているそうである。

### ○異文化理解について

日本人は、自分たちの文化と違うものは、なかなか受け入れようとしにくい傾向がある。したがって、日本で外国の文化を紹介したり体験したりすることは、国際理解教育のうえで大きな意義をもつと考えられる。

一方アメリカでは、むしろそれらの異文化がスムーズに受け入れられ、やがてアメリカの文化の中にうまくとけこんで、更に新しい文化を創り出しているような気がした。

それゆえ、特別な異文化紹介のような取り組みがなされていないにもかかわらず、うまく受け入れられ理解されるのではないかと思えた。

### ○コミュニケーション能力の育成について

前述したように、私が訪問した小学校では、コミュニケーション能力の育成の一つとして、コミュニケーション・スキル(Communication Skills)というReadingを中心にしたカリキュラムが設けられていた。文字が読め、内容が理解できるという基本的な力を確かなものにすることが、コミュニケーション能力の基本だと考えられているからである。読めるまで何度も何度も繰り返すことで、語彙を増やすと同時に、読んだり話したりすることへの自信をもたせることにつながっているような気がした。

また各教室にはシンキングマップ(Thinking Maps)という8つの思考の仕方が図式されて掲示してあった。幼稚園の壁にも見られたように、小さい子どもの時から段階的に論理的に思考できる力を育てていこうとしていた。論理的に思考できる力は、お互いが納得し合ったり理解し合ったりするうえで大きな力をもつと考えられる。ただ、教室の授業の中で、子ども同士の関わりがあまり見られなかったのが残念であった。

### ○人権を尊重する心の育成について

Character educationというカリキュラムのなかで、責任、誠実、尊敬などの人間の心を耕す教育がなされていた。そして月ごとの項目が決められ、毎日それが子どもたちにくり返し話されていた。また、日曜日には教会へ家族で行くなど、宗教心とそれらが深く結びつきながら子どもたちのなかに浸透しているように思えた。

## ③ 小学校における外国語学習について

日本の小学校での英語学習は、総合的な学習のなかの国際理解教育の一環として始まったばかりである。訪問した小学校では、4年生と5年生が、週に2時間スペイン語の授業を受けていた。この地域や学校には南米からの移民が多く、彼らはスペイン語を母国語としているからである。この点では、日本の小学校で世界の公用語という理由で英語を取り上げ学習していることと比べて、より現実的であると言える。また、これらのカリキュラムは州で決められたものがあり、中学校や高校へとつながっているそうである。

#### ④ 国際理解教育における課題について

このように日本とアメリカの小学校における国際理解教育に焦点を絞って比較・検証していくと、それぞれの環境やお国事情によって「小学校における国際理解教育のあり方」という一つの言葉にまとめられない思いがした。

大切なことは、しっかりと子どもたちや子どもたちが置かれている環境を分析・理解し、その上で、どんな力をつければよいか、その為にはどんな方法があるか、どんなことを仕組んでいけばよいか、など考えていくことが重要であろう。もう一度、今進めている国際理解教育が、私たちが暮らしている地域や子どもの実態にあっているか再考することが大切であり今後の課題である。

#### (4) 今後の展望

このプロジェクトで本校から私を含めて2名の教師がウィリアムソン小学校を訪問させていただき、アメリカから2名の教師を本校にお招きすることができた。

お互いにそれぞれの国の教育事情を直接目で確かめ、グローバルな立場から自分たちの進めている教育をふり返ることができたと思う。できればこのプロジェクトが継続し、教師の交流だけでなく、子どもたちの交流にまで発展できれば、ますます意義深いものとなるであろう。これからも児童の作品の交流やインターネットでのメールの交換などを続けると共に、直接、子どもたち同士が話ができる機会を探っていきたいと考えている。その際、言葉の問題が大きな壁になるであろうが、それ以上に得るものが大きいと思われる。

#### (5) おわりに

このプロジェクトのおかげで多くの人と知りあえることができた。また、言葉が通じなくても自分の思いを伝えることができ、理解しあえることも分かった。そのことを私だけでなく、子どもたちにも分かってもらいたいと思う。国際理解教育の原点を学ばせていただいたことに感謝したいと思う。